

日本元炆大炆

井北
市至
众曰
曰虫

日本机戦連盟
厳選
燐字
東島通商語
辞書

田昌

去DUM.小.卅.六.卅.廿.廿.下.曰.曰.本.兀.歟.大.炊.火.甚.炆.炆.入.炆.火.去.曰.本.国.才.马.大.火.大.入.火.、
 兆.才.炆.火.炆.拜.台.曰.光.炆.火.材.炆.稍.四.矣.也.才.炆.入.炆.才.凶.凶.、
 曰.本.兀.歟.大.炆.、
 炆.台.炆.入.上.炆.、
 去DUM.小.卅.六.炆.炆.甚.甚.面.拜.因.炆.火.炆.四.曰.坑.基.二.曰.本.曰.面.ハ.、
 才.乙.メ.爻.勳.炆.节.爻.、
 拜.因.ハ.图.大.炆.拜.ハ.卅.乙.メ.节.爻.兰.台.台.才.才.台.炆.炆.瓦.四.节.爻.ハ.炆.、
 台.旦.炆.炆.丹.瓦.台.、
 去DUM.小.卅.六.炆.炆.甚.甚.面.、
 才.炆.炆.台.材.炆.炆.客.矣.炆.曰.ハ.乙.才.爻.ハ.炆.、
 台.旦.炆.炆.丹.瓦.台.、
 兆.才.炆.乙.炆.拜.卅.乙.メ.ハ.节.爻.光.乙.才.ハ.矣.炆.爻.材.炆.、
 瓦.户.炆.炆.炆.ハ.万.才.炆.曰.昔.炆.ハ.火.亡.去.炆.炆.台.才.、
 去.台.母.炆.炆.卅.兆.炆.才.台.台.、
 炆.炆.拜.台.台.入.图.曰.材.炆.瓦.炆.拜.曰.本.兀.歟.大.炊.炆.甚.甚.面.ハ.图.昌.、

DUN. 11-11-:-x
曰夬兀歎大炊

ХБДЗЦЕЦХ

[illegible][illegible]

ХН, БЭЭЗНИ ЦЭ ЮЕНЭЗ ЖУЗНИН ЗНОЮБЮ БИ ЗЖУНИН ХИДЬДУХУ ЗЭЦЭИ ЗБХ ЗУИН ЗБИБ ЮНХ ДУЮУ
ДУЮЭДИНИ ТН ДУИ ЗУИН ЦРИБИБ. ДЭ ДУИ ЦЭЗ ЗЭСЭХНИ ЮӨӨНӨ ДЭ ДУИ ЗЮЙНӨ ЗУИН ШНУУЮ ЦЭ ТН
ДУИ.

Цэ ебзипи юэзу Ын дии иидиизипи зэсэх хп збэибли зипох. дэ зпэрни епцу ебзипи зипох зипи бэрд хп дэ диюу ебюиипи епцу юпххэю дииебле зипи збибдипи зипи ебдипи зипи бэрд.

ЮНХХЭЮ РИЕБНЕ ЗИП ЗБИБДИИ

ま え が き

西暦 2018 年 4 月 8 日に成立して以来、日本机戦連盟は日本において我々の文化を案内し、人と人の心をつないできた。だが、その言語文化に親しむためには、非常に多数の場所に混沌と散らばった資料を読み込むことが要求されてきた。

日本机戦連盟としてもただ手をこまねいていたわけではない。西暦 2023 年には、アイル共和国文化省対外広報処日本語部署（珥困ㄥㄨㄤㄨㄤㄨㄤㄨㄤㄨㄤ二曰本曰ㄨ）による冊子 𐄂𐄂𐄂𐄂𐄂𐄂 𐄂𐄂𐄂𐄂𐄂𐄂 𐄂𐄂𐄂𐄂𐄂𐄂（邦題：『84 字でらくらく隣字入門』）を頒布した。この本は、アイル共和国の全ての人が知っている 84 種の隣字を示すものであり、これを通じて隣字文化に親しんでもらおうと努力した。西暦 2024 年には、かるた 𐄂𐄂𐄂𐄂𐄂𐄂 𐄂𐄂𐄂𐄂𐄂𐄂 𐄂𐄂𐄂𐄂𐄂𐄂 を頒布し、遊びを通じて東島通商語を構成する 18 の文字を記憶してもらえよう努力した。

しかしながら、たとえ 84 の隣字と 18 のペメセペ文字を暗記したとしても、それだけでは我々の声を聞いて理解することはできないし、我々に思いを伝えることも極めて困難であろう。

いま、我々は、語を選び抜き、辞書を作った。この辞書の内容を全て理解することで、日本机戦連盟が送り出してきた全てを読むことができるだろう。

西暦 2025 年 5 月 4 日

日本机戦連盟

東諸島共和国連合

众丛众昇



編集

hsjoihs [細承充]

編集協力

双叶 舞 [橘兀立]

meloviliju [柶斗罌]

校閲

Mítrov [巾ワロ]

双叶 舞 [橘兀立]

meloviliju [柶斗罌]

紙面レイアウト

えすわい [巾帙刀]

DTP組版

hsjoihs [細承充]

親字グリフ手書き

えすわい [巾帙刀]

フォント製作

えすわい [巾帙刀]

hsjoihs [細承充]

たもと [凡凡凶]

CI/CDパイプライン構築

れもん [芭耨杏]

組版ソフトウェア

Vivliostyle (<https://vivliostyle.org/>)

𠂔𠂔𠂔𠂔

市 玉

𠂔 字

この辞典の使い方

1. 見出し字

1-1. 収録字の選定

まえがきで提示した「日本机戦連盟が送り出してきた全てを読む」という観点に基づき、330 字程度を選定するとともに、異体字も 50 ほど採録した。

1-2. 分類と配列

「日本机戦連盟 厳選燐字辞書」では、燐字に遭遇した読者が、その字形をもとにして音と意味を探し出せるようにすることを目的として編纂されている。それゆえ、𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺で用いられている、書き始めの筆画に基づいた分類を用いることで見出し字を配列することとした。

「**図9**」においては、字の書き始めのうち、最初の2回分の「筆の動かし方」をもとに分類することを原則とする。これはつまり、1画目が一方に引っ張る単純なものであれば先頭2画を取り、1画目が折れ線であるときには1画目だけを見て判断するということである。

例外として、「単純な1画のみ」で構成される字は、それを2回繰り返して判断する。要するに、たとえば丨の字は𠄎の爪見出しのもとに配列されるということである。さらに、ノで始まる字は数が多いため、検索の便宜のために、ノの中でも乂および犬で始まる字は別の爪見出しの下に配置した。また、初画が口の一部を成している字は口に配置することを原則としつつも、これまた所属字が多いことを鑑みて日および田で始まる字は別立てとした。これらの例外は𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎における既存の慣習に従ったものである。

同じ爪見出しの下に属する字の間の順序は特に定めなかったが、近形の字をなるべく近くに配置するよう心掛けた。

1-3. 漢字転写

燐字文化に対する日本語話者の親近感を醸成する目的で、アイル共和国文化省対外広報処日本語部署はそれぞれの燐字の字体ごとに漢字をあてがい、「漢字転写」を定めている。(一例を挙げると、兀炊という語を「机戦」と表記して「きせん」と読むといった行為は、この漢字転写に基づくものである。)日本語話者にとって字の意味や文の意味を概括する上で極めて有用であ

ることを鑑み、この辞書では漢字転写を墨付きカッコの中に入れて表示することとした。

1-4. パイグ音とその表記

隣字はパイグ語のみが用いる字ではなく、パイグ語も隣字のみを用いる言語ではないが、品詞に対する解釈を入れずに隣字列を音声に起こす方法としてパイグ音での読み上げが広く行われている現状も踏まえ、パイグ語での慣習的な読みが安定している字についてはその読みを掲載した。吉リ矛現象などによって発音に変化が生じるものについては、変化後の発音に基づいて表記した。また、パイグ音からの検索を可能とすべく、巻末に仮名索引を用意した。

2. 見出し語

2-1. 収録語の選定

隣文において、なにを「単語」と認定するかは極めて難しい問題である。この辞書では、実用性に資するべく、構成字から語義を導き出すことが本質的に困難であるような音写語や固有名詞といったものを積極的に収録した。特に、豊かなボードゲーム・カードゲーム文化に関心の強い読者の参考に供するため、これらにまつわる用語を重点的に扱った。

収録語は隣字圏全体に広く通用するものを優先しつつ、選定した約 330 字のみによって構成されている語だけを収録した。また、パイグ語簡易辞書としての利用も可能となるよう、パイグ語での用例を優先し、例文もパイグ語の発話として自然なものとなるよう心掛けた。

ただし、パイグ語で頻用される語であっても、表音文字であるパイグ文字で書くのが一般的である語については、それを無理に当て字した隣字表記を掲載することは避けた。具体的には、「トゥー→ドゥー→ルー→ドゥー→」「トゥー→ルー→ドゥー→ルー→」（ともに『ほにやらら』『なんちゃら』などの意味）を強引に書き表す𐄧𐄧𐄧𐄧・𐄧𐄧𐄧𐄧・𐄧𐄧𐄧𐄧といった表記は見出し語としていない。

3. 品詞欄と品詞分類

それぞれの見出し語には、パイグ語での用例をもとに、品詞欄を設けた。その語形変化の乏しさも伴って、パイグ語の品詞論は未だ定説を見ないが、便宜上次のような基準を設けて品詞分類を行った。以下、「単語未満」・「一単語」・「複数の単語の組み合わせ」の3種類に大別して論じる。

3-1. 単語未満

独立した要素として文中に単独で登場することのできない、いわば「単語未満」としては、「略号」・「接頭辞」・「接尾辞」の3種類を認定した。

「略号」とは、文中で用いるのではなく、もっぱら図や記譜などの場面で用いられる、表意的な記号としての燐字の使用を意味する。

単独の語としてではなく、他の字や語の前や後ろについて結合して単語を形成するようなものを「接頭辞」「接尾辞」と分類した。

3-2. 一単語

人や物などを表す語、およびそのような語と似た構文的ふるまいを見せる語を「名詞」と分類する。

物事の動作や状態などを表し、文の中核となる語を「動詞」と分類する。その中でも、状態を表す傾向が強く、構文的にも目的語や進行相マーカーなどを取りづらいものを特に「状態動詞」と分類する。また、動詞のうちその目的語として節を取るものは「節要求動詞」と分類する。

形式上は文の中核の位置に生起するものの、実質的な意味を持たず、ただ主部と述部の間を分離しつつ繋ぐ役割を持つものは、「繋詞」と分類する。

名詞を直後に伴って、文全体を修飾するようなフレーズを作る語を「前置詞」と分類する。また、名詞のうち、前置詞を用いることなく文の舞台となる時間・場所を表せるものを、それぞれ「時間詞」「場所詞」と分類する。

他の文中に現われるのではなく、感情を直接表現するために発される類の語を「間投詞」と分類する。その中でも、その感情の原因を直後に叙述すべく節を取るものは「節要求間投詞」と分類する。

直後の名詞を構文的・意味的に修飾する傾向が強いものは便宜上「連体詞」と分類する。ただし、述語としての用法が多く見られるものは基本的に「状態動詞」と分類した。

文末に来て、文に対してニュアンスを付加する役割を持つ語を「文末助詞」と分類する。

直前に数量表現を伴い、その量や順位といったものを具体化する表現を「助数詞」と分類する。

文と文を繋ぐ役割を持つ語を「文接続詞」、名詞と名詞を繋いで新たな名詞を作る語を「名詞接続詞」として分類する。直前に名詞を取ることも文を取ることもできるものは、便宜上「特殊接続詞」として分類した。

歴史的経緯によって成立し、決まり文句として定着した4文字からなる表現は「四字熟語」として分類する。多くは田喜昌に代表されるラネーメ古典に由来するような表現であり、現代パイグ語の品詞論には必ずしもそぐわない構成となっている。

動詞の直前に置かれ、動詞の意味を変容させたり意味を付加したりする語を、ここでは一律に「前置助動詞」と分類した。助動詞という名前をこれほどまでに幅広い語に付与することには若干のためらいもあったが、動詞との間に名詞が介在できないという特性を曖昧性なく表現するにはこの品詞名を採用することが必要であると判断した。また、前置助動詞の中でも、命令や依頼の意味を表し主語をあらわに用いないものを、「命令性前置助動詞」と分類した。

用言に由来して動詞の後に置かれる語については、動詞との結合が語彙的と見なせるようなものは接尾辞の一種とし、動詞を選ばず結合でき必ず動詞の直後に置かれるものを「後置助動詞」、動詞との間に別の語が介在でき比較構文などが後続しうるものを「後置様態副詞」と分類した。

3-3. 複数の単語の組み合わせ

複数の字が組み合わせあって単一の意味を表していると認定できるものの、その構成要素となる字が文中では必ずしも連続せず、間に他の語が割り込む余地があるようなものが多数存在する。これを単語と認めず、辞典に収録しない方針も可能ではあったが、隣文の言語感覚をしっかりと理解する上で、これらのいわば「分割可能な熟語」の把握は不可欠であるため、積極的に掲載するよう努めた。

分割可能なそれぞれの部分が文成分として明確に認定できる場合は、「動詞＋目的語」「主語＋動詞」「動詞＋前置詞」などと表記し、例文を通じてどのような位置で分割可能となるのかを示すこととした。そのような分析をする根拠が薄弱である場合は、無理に既存の品詞論に当てはめず、「構文」とのみ表記することとした。

4. 語義と訳語

4-1. 語義の分類

語義には、先頭に品詞を記した。品詞が同一であっても、語義が大きく異なる場合については行を分けた。

4-2. 補足説明

語が持つ意味に対しての補足説明は、() で示した。語自体のパイグ語での頻度や構文的制約などについて付記すべきことがある場合は、[] で示した。また、必要に応じて行を改め追加の説明を行った。

5. 例文

語の用い方を簡潔に示すため、一部の見出し語には例文を添えた。例文はパイグ語の発話として自然なものとなるよう心掛けつつ、パイグ文字で表記される語を避け、選定した隣字だけで全て書ける文を掲載し、訳文をつけた。解釈の幅を適切に伝えるべく、必要に応じて1つの例文に対して複数の訳文を掲載したり行を改め追加の説明を行ったりするなどして明確さを追求した。